
東方追求記 ~ in Spring ~

AICE99

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方追求記 ~ i n S p r i n g ~

【Nコード】

N1593T

【作者名】

A I C E 9 9

【あらすじ】

完全に東方の二次創作です。

私としては、処女作となつていきますので、至らないところもあるとは思いますが、そこは妥協していただけると、喜びます。

この小説は、主に主人公が活躍します。しかし、オリキャラも出てきますので、苦手な方はご遠慮ください。

ですが、この物語を書いているのは、
あくまでも、私であります。

勘違いはしないで下さい。

私とは、筆者のことではありません。

一応、オリキャラです。名前はありま
せん
章で分けています。

現在妖々夢。つまり春パートを執筆中
です。

H a p p e n i n g . o f S p r i n g (前書き)

このようなしがない小説をお読みいただきありがとうございます。

この小説は、私の処女作となっていますので、

至らない点しか無いかもしれませんが、

そこは皆さんの寛容な心で妥協していただけると喜びます。

これは、ただ純粹に楽しんでいただけたら…

とおもって作った小説です。

楽しんでいただいても、私は喜びます。

では、ここからは存分にお楽しみください。

H a p p e n i n g . o f S p r i n g

この年の冬は例年よりも格段に冷え込んだ。
しかし、年も明け、もう春だぞっ！
という頃、

厳しい寒さも緩み、
雪が溶けてくる季節となった。
木々は芽吹き、
土から出てくる花も頭を出している。

ここは幻想郷。

人間、妖怪、鬼…そのような物々が行き交う
場所である。

人々はここで毎日遊んで過ごす。

ある者は自分より小さな者と。
またある者は自分では到底敵わないと
分かっている強敵と…

そんなのほんとしたこの場所の春、緩やかに
その事件は進んでいくのである……

）

）

）

）

）

）

A s l o w l y d a y

私はその日、神社の境内で一人佇んでいた。
桜の花が咲き、とても綺麗な印象を受けた。

もう既に満開。文句なんか言えない程の淡麗さである。

…まあ、そんなことを書いていたら何ページも
使ってしまったそうなので、この位にしておこう。

その日、私は満開の桜を見ていた。

ただそれだけだった…

）　　）　　）

）
）
）

私は神社の境内にいた。

つい最近春になったと思いきや、

既に桜の花が散り始める頃となっている。

そのため、

私はそこにある花びらを掃除している

ところだ。

と、その時大きな声が神社から聞こえた。

「おーい！アンターちよつとこつちに来なさいー！」

…いい加減名前ぐらい覚えなないものか…

私は3ヶ月程度前、この神社・博麗神社・に
辿り着いた。

理由は…分からない。

山奥をフラフラと歩きながら山の桜を

見ていたら、何時の間にかここに辿り着いていた。

…ただそれだけなのだから。

おっと…話題がそれてしまったか…

先程の声の主は、博麗霊夢。

この神社の巫女である。

因みにこの神社の神主は…言わないでおこう。

「ちよっと、アンタ！何ブツブツ言ってるのよ！！

早く来なさいよ！！」

「分かった分かった！！」

…どうしてこんなに離れているのに、

小さな声が聞こえるのだろうか…

そう少し関心しながら。

また、うっとおしくも思いながら、

私は彼女の所へ向かった…

くくくくくくくく

数分後、私はちゃぶ台の前に、

彼女と向き合う形で座った。

周りは完全に無音。

時々葉のこすれ合う音が聞こえる。

他に聞こえるものといえば…

彼女が茶をすする音ぐらいか…

向き合って座り何分が経ったのだろう…

私はそんな他愛もないことを知りたくなり、

顔を上げた。

そこでようやく思い出した。

彼女の家、つまりはこの博麗神社には

どこにも時計が置かれていないことを…

何故だろうか？

時間が分からなくて不便なことはないのだろうか？

そんな疑問が頭に浮かんだ。
それにしても、この幻想郷には時計が
置いてあるところが少ない。
唯一置いてあるとするのなら、
魔法の森の奥に位置する香霖堂
ぐらいなものだろう。
そこには、外の世界。
つまり私の住んでいた世界から幻想郷へ
流れ込んできた物を売っている店だ。
そのため、そこなら売っている…
のかもしれない。

そうだ。不便じゃないか聞いてみよう。
そう思い、私は大きく息を吸い…

「ね、ねえ、霊夢？」

「あなた、聞きたいことがあるのだけれど…」

「……」

「……」

ハ、ハモツた……

「そ、そっちからいいよ。」

「いいえ、あなたからどうぞ。」

「……」

「……」

…その後数分間の沈黙。

「じゃ、じゃあ、言わせてもらおうよ？」

「それなら言わせてもらおうわ。」

またもハモる…

そんな会話が続き、

結局その日は聞きたかったことを聞けずに

一日を過ごし、終わった。

……あれ？私は何を聞きたかったんだろう？

そのダラダラとした一日が終わる頃、

一方ではある計画が押し進められていた…

T o b e c o n t i n u e d …

Stealer of Spring

…ここはどこ？

私は一体…？

桜が咲いて…

あの…忌まわしき花…

）　　）　　）　　）

「ちょっと！！待ちなさいよ！！」

「だ、誰が待つものか！！」

私と彼女・博麗霊夢・は、

新種の追いかけてっことをしていた。

きっかけは些細なことで…

「ちょっと、アンタ私のお饅頭食べたでしょっ！」

「た、食べてないよ！？」

「アンタの口元に付いている、あんこが動かぬ証拠よ！！」

「っ！？」

というようなことがつい先程あり、

彼女は当たり前だが、激怒。

懷から針を出して私を追いかけてきている。

勿論私はそれが当たったら一溜まりもない

ため、必死で逃げているわけだが…

それにしても、漫画のような失敗をした…

と、今になって反省している。

しかし、追いかけてくる彼女も可愛いものだ。

顔を真っ赤にして、

追い付けるはずもないのに、
必死に追いかけてくる。

ただ、もし彼女が冷静ならば、
空間転移を使われ、

私は一発KOだっただろう。

だけれども、一応私も人間だ。

その内疲れてはくる。

その点では、彼女は持久力に秀でていると
いえるであろう。

今までは差が15mくらいあったのだが、
何時の間にか5m程にまで詰め寄ってきている。

…こ、こうなったら最後の手段だ!!

そう思い、私は彼女へのジョークを考える。

しかし、相手も待つてはくれない。

どんどんと距離は縮まっていき…

残り1m程となった時、彼女は、

「私のお饅頭…私のお饅頭…うう…」

…食べ物への恨みは怖いものである。

そして、身の危険を察知した私は、

「あ!! 霊夢。UFOだよ!!」

定番のジョーク。

今時こんなのに騙される子は

殆どいないだろう。

私はとつさに しまった!! と思った。

しかし、天然ここに極めり。

彼女はわけだかの指差した方向に顔を向け、

「え!?! どこっ!?!」

と、騙された。

…彼女の知能レベルは小学生以下でした。

その間に、私は近くにあった隠れ場所に身を隠した。

まさか、そこで異変が起きるとは微塵も思っていなかった。

いきなり空が暗くなり、

光は一筋残されるだけとなった。

それは…自然の感じでは無く…

不自然であった。

私と霊夢は空を見上げた。

そこには…私が言った通り…

U F O が浮いていた…

くくくくくく

その光は、どうやら幻想郷の何かを持って行っている様子だった。

私は急に寒くなったと感じた。

気のせいか…？とも思ったが、

そうでもないらしく、霊夢は小刻みに震えていた。

それは、寒さからくるものなのか、

恐怖からくるものなのかは分からなかったが、

彼女の、「ねえ、少し寒くない？」

という言葉から、やはり、気温が低下して

いるんだな。という予想はついた。

その時も、彼女の顔は先程までの

赤さはなく、少し青く見えた。

しかし、寒いというのはおかしい。

もう既に桜は散り、

春も終わろうとしているのに、

震える程の急な寒さである。

どちらかというと、暑くなっても

いい季節なのである。

そうこう考えているうちに、

息は白くなり、

草に霜も降り始めた。

現在の長袖一枚では足りなくなってくる。

白いものが降り始めた。

これを見たら誰でも、

えっ！？と思わざるを得ないだろう…

それに私は手を触れた。

すると、一瞬で白いものは消えた。

理解するのに、30秒も要した。

これは…雪？

暦では、今は晩春、初夏という頃である。

降る季節ではないのだが…

そして、ここまでの出来事を整理してみる。

簡潔に言くと、一気に冬になった。

ということが、私の頭で打ち出せる結果であった…

その間にもUFOは幻想郷の“春”を取っていく。

そして、春の面影がすっかり無くなってしまった頃、

UFOは空へ姿を消していった…

T o b e c o

n t i n u e d …

Look under the Ground

ここは…いつも雪が降っている。
いつもあたり一面真っ白だ…
ここに春は来ないの…？

）　　）　　）　　）

「あうう…あうう…」

「がくがく…ぶるぶる…」

「「寒い！！」」

めちやくちや寒かった。

先程UFOが現れ、ここの春を奪い、
すぐ去って行った。

ほんの数分の出来事だった。

そして、現在は辺り一面雪景色。

到底春の頭では考えられない光景である。

それもこれも、全てはUFOのせいだ。

それにしても、この雪は止まないのか？

私が考えている間、

彼女も何かを考えていた。

数分後、彼女は口を開いた。

「これは…異変ね！！！！」

……なんだ、そんなことが。

この状況、誰が見たって、

異変としか思えないだろう。

そんなことを、彼女は自信満々に

言うものだから、つい笑ってしまった。

「何よ？何か文句でもあるの？」

……正直に言います。

ありまくりです。。

だが、そんなことを言ったら、
この会話が長くなりそうなため、
あえて、「ううん。何でも無いよ。」
と応えておいた。

しかし、今のこの状況は笑い事ではない。
これは…専門家の霊夢様に聞くしかないな。

「あの…霊夢さん？ちよつとよろしいでしょうか？」

「…何よ？つてか、そんな改まった口調、アンタには似合わないわよ？」

「……」

わ、私だつて言いたくなかつたよ！！
しかも、似合わないと言われた。
カチンときたね。

「……私だつて言いたくなかつたんだよ！！」

「じゃあ何で言ったのよ！？」

ぐう…そうくるか…

し、しかし、こんな他愛もない話をしている暇もないので、
簡潔に済ますことにした。

「も、もうそんなことはいいのよ？だけど、この異変は誰の仕業だ
と思う？」

「よくはないんだけど…まあ、いいわ。はつきり言つて分からない
いわー！！」

……… またも自信満々に言われた。

そこは自信を持つべきでは無いと思うのだが…

「でも…前にもこんなことがあつたわね…」

そう言つて考え始めた彼女の顔は…

まさしく専門家のそれだった。

く。く。く。く。

15分後、曇天、風はとても強い、雪は大荒れ。

という最悪なコンディションの中、

私と彼女は飛んでいた。

それにしても驚いた。

ここ、幻想郷に来た途端に空を

飛べるようになったのだから。

元々私が住んでいたところでこんなことが

出来たら、一大ニュースとして取り上げられるだろう。

“都市部にヒューマノイド発生！！”という感じで…

さて、私達がどこへ向かっているのかというと、

空を突き抜けたその先、冥界…

だそうだ。

私は冥界は地獄とばかり思っていたので、

冥界が空の上の上ということを知り、

とても驚いた。

それに、まさか生きている間に

そんな死んだものが行くような所に行くとはいえなかった。

行くとは微塵も思っていなかった。

しばらくして、雲を突き抜けた。

雲の中は予想以上に痛かった。

雲はよく、「綿あめみたい！！」

と、小さな子供は言うが、

実際はそんな生ぬるいものではなく、

入ると、上から石がどんどん降ってくる感じがする。

出ると、そこは…天国だ！！

太陽は照っているし、雪も降っていない。

しかも、地上よりも暖かい。

普通は上空の方が寒いと思うのだが…

しかし、何かがおかしい。

「やはりね…」

彼女が呟く。

どうやら彼女の予想は当たっていたようだ。
おかしいところは…桜の花が、
雪の代わりにちらちらと舞っていることだ。

こんな上空に桜吹雪である。

しかし、とても綺麗である。

流石に、異変と言えど綺麗なものには目移りしてしまう。

この風景を写真に撮って、持ち帰りたいぐらいだ。

だが、そんな暇もなく、彼女は突き進んで行く。

そこは流石専門家というべきか…

何か大きな門が見えてくる。

その前には門を守るように大きな結界。

「ここが第一の関門よ。」

そう言って、彼女はクスリと笑った。

…関門と言ったのは嘘でしょう??

その直後、私達の視界に三人の影が飛び込んできた。

「お出ましね。覚悟はいいかしら？」

と、彼女は楽しげに言い、懷から針を取り出す。

「いや、争うつもりは無いんだけど…」

と、そう言って苦笑いするのは、帽子に

月の形のオブジェが付けられている大人しそうな女の子だ。

「あ、そうなの？つまらないわね…」

そう言って霊夢は針を懷へししまう。

「あ、紹介が遅れたわね。彼女はルナサよ。」

「私はルナサ・プリズムリバーよ。よろしく。」

「はい。よろしく願います。」

「で？何で出て来たのよ？三人揃っちゃって。」

霊夢の言葉だ。容赦がない…

「え？久しぶりの来訪者だから、出迎えようと思ってな…」

「じゃあ、通らせてくれるわよね？」

…なんと、彼女の顔が怖い。

顔は笑っているのに、目だけは笑っていない…

「も、もちろん…」

「では、通らせてもらうわ。」

怯えた調子のルナサに、流石霊夢。

鬼だ…

「さて、次は冥界よ。準備は出来ているかしら？」

も、もう冥界か…正直言つて、まだ怖い。

知らないものは誰しも怖いものだが…

「さあ、結界を越えましょう。」

…返事を待たないところがまた彼女らしい。

私はクスリと笑い、

「そうね。行きましょうか。」

と返す。

「どうしたのよ？薄笑いを浮かべて。何かあったの？」

「いえ、何でも無いわ。それより、行くなら早くしましょう。」

そう言つて私は彼女より先に行こうとするが…

「いたっ！！??」

案の定、結界にぶつかる。

「あはは、引っかったわね。」

彼女は爆笑だ。

「どうやって越えるのよ!？」

「上を飛び越すのよ。」

……へ？今なんて??

「見本はこうやって…ね!」

そう言つて彼女は高く飛ぶ。

飛び越した彼女は続いて、

「早くこっちにいらっしやうい!!」

と、結界の向こうから呼びかける。

……くそっ！！直線で行ければいいのに！！

そう思いながらも、私は飛び越す。

次は冥界だ。

扉の向こうからは何か不吉な空気が流れ出てくる。

だが、行かなければならない……

行きたくないんだけどなあ……

From the Hades

ようやく桜が8分咲きだ。

今までずっと雪景色だったここには考えられない光景。
ただ…

満開の桜を見たいものだ…

?? ? ? ?

? 私たちは、冥界と此の世を

分ける大きな門の前に立っている。

ホントに来るとは思わなかったな…

入りたくないけど…

行かなきゃ春は戻らないから…

でも…どうやって開けるの?

「さて、行きましょうか。」

「え!?!で、でも…」

「何よ?」

「こ、この門はどうやって開けるの?」

「ああ、そんなことね。」

そう言って彼女は門を押す。

…彼女が馬鹿力なのか、門が軽いのか。

もし後者ならば、なんて弱い守りなんだ…

どちらにせよ、門は開いた。

ここからが本番だ…

〵〵〵〵〵

「春…春はどこに…」

桜が舞う長い長い階段の中腹、

その少女は春を探す。

そこは白玉楼。

死んだ者の魂が地獄の閻魔に裁かれるのを待つ、一言で言うのならば…

死人の溜まり場という感じだろう。

「は、春は…??」

そう言いながら涙目になっている少女。

彼女の名は、魂魄妖夢。

この白玉楼の庭師だ。

髪は銀、服は緑、剣をいつも二本携えている。

見た目はとても可愛いらしい少女である。

ただ、怒ると恐い…というのは言わないでおこう。

彼女に剪定された庭は綺麗に揃っており、

見た者を凌駕する。

「は、春がないと幽々子様に…!!」

未だに春を探している哀れな少女はどうやら主に命令されたようだ。

主というのは…また別の機会に…

くくくくくく

「あら、あなたは…」

私達は長い階段に登りに登っていた。

というよりは、飛びに飛んでいた…

というのが正しいだろう。

そんなことはどうでもいい。

よくないかもしれないが、どうでもいい。

ずっと飛んでいると、一人の少女に

出くわした。

霊夢が声をかけたら、彼女は本当に

“ビクッ”という擬音語が似合う程に

身体を震わせた。

後に顔を上げ、私達を見た後ほっとした様子で再び作業に戻った。

「ちよつと、私のことは無視かしら??」

優しい声で霊夢はそう言った。

…目だけが笑っていないのは内緒だ。

「い、いえ。そんなことはありませんよ。」

言いながらも顔を上げない彼女に霊夢は限界を突破したのか、彼女の後ろに瞬間的に移動し、静かに頭に拳骨を落とした。

「ちよつ…いたつ…!!」

「これから無視はしないでね。私は無視をする人が大嫌いなもの。」

優しい声で言っています。やはり目がわらつ t… (ry

「…で? なんの用ですか?」

「単刀直入に言うわ。」

「はい。」

「春を返しなさい。」

「…へ??」

「聞こえなかったの??じゃあ、もう一回言うから、よく聞きなさい。」

「…はい。」

「春を返しなさい。」

「…ええ!??ど、どうしてここだと!??」

「それは…み、見れば分かるでしょ!!見れば!」

実際彼女は勘でしか動いていない。

これも言わないでおこう。

おっと、これで貸しが二つも出来てしまったな…

「で、ですが…か、返すつもりなんて全く、全然、ちよつとも、ありませんからね!」

「なら…力づくで取り返すわ…」

「あ、あなたこそ“なけなしの春”を持っているのでしょ。それ

なら容赦はしませんよ…!!」

そっいい、両者戦闘体制に入り…
春を奪い合う闘いが幕を開けた…

…あれ??今考えたら…馬鹿らしいな…

く。く。く。く。

終了。

勝者：博麗霊夢

敗者：魂魄妖夢

戦闘時間：30秒

…なんてことだ…相手はボロボロなのに、
こちらには傷一つついていない。

酷い結果だな…

「さて、行きましょうか。」

…あれ??も、もうですか…?

と、甲いの言葉もないのですか!?

「あなたの言ってることのほうが幾らか辛辣だわ…」

「え?声に出てた??…てへっ」

「こ、これで幽々子様に…これで…(ブツブツ)」

「い、行こうか。霊夢…あはは…」

「そうしましょうか。」

さっきよりも何かを満喫したような顔になってるのは何故だろう…
そんなのとっくの昔に答えは出てるか。

彼女は生粋のS女だ。

さて…次に進もう。

何か危険な雰囲気だ…

）
　　）
　　）
　　）
何か来る…何か来る…
怖い…もう少しなのに…
…

少女は…嘆く…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1593t/>

東方追求記 ~ in Spring ~

2011年10月9日02時22分発行